

庭層住宅

Keywords

密集市街地 防災
中庭 異層的コミュニティ

1. 背景

阪神・淡路大震災から 15 年以上経った現在、この出来事は既に過去の出来事として扱われ、経験の風化が急速に進んでいる。しかし、首都圏の地震災害の可能性が切迫しているという事が既に定説となり、様々なメディアに取り上げられている。地震災害に最も弱い地域は木造密集市街地である。木造密集市街地では、一度火の手が上がると、瞬く間に周囲に火が燃え移り、大規模な火災へと発展し易い。1923 年に起きた関東大震災においても全壊・焼失建物 32 万棟の内 21 万棟が焼失によるもので、火災が都市に与える被害は甚大であることがわかる。

しかし、東京には数多くの木造密集市街地が存在する。狭小な土地に細かな住戸がひしめき合うことで、複雑な路地空間を創出している。住人のプライベート領域がパブリックな空間にまで滲み出し、数多くのアクティビティを誘発する。路地空間とはハードとして存在する建築を、ソフトである住人がフレキシブルに使用することで生まれる。これは現代における可変的な建築とは異なり、永続的な可変が期待できる。

地震災害と路地空間。現在、この相反する二者の関係は道路拡幅や高層マンションの建設など、まちの様子を一変させる事で解決されている。しかし、このような解決法は地域に根付くコミュニティ、水平的な風景の連続など密集市街地でこそ体験できる様々な利点を失うことにつながる。私はこのような現状に対し、路地空間を残存させつつ、災害に強い密集地の提案を行う。

2. 敷地

敷地は東京都足立区北千住とする。(図 1)このまちは江戸時代に日光・奥州街道の宿場として発展した。現在では旧街道となったものの、かつての地割を読み取りことができ、非常にコンテクストの強い通りであることがわかる。

街道沿いの区画整備が整っているのに対し、それを挟むように存在する住宅街は、細く入り組んだ路地が多い。東京都都市整備局が行った調査では地震による被害が大きいと想定され、対応を急いでいる。この地震に対して脆弱である、複雑な路地空間を形成している要因は二つ挙げられる。

第一に、かつての水路がそのまま路地になったことで

ある。このまちは宿場として発展したまちであるが、その周りには田畑が広がり、複雑に入り組んだ水路がまち一体を覆っていた。この水路がその姿のまま整備され現在に至っている。

次に、戦災復興によるものである。このまちは戦時中の空襲により多くの建物が消失した。しかし、戦後の復興計画からこの地域は外れ、無計画のままに細かな住宅群が建てられた。

これら二つの要因が重なることで、非常に複雑な路地空間を形成している。

また、寺社仏閣を除いた空地が非常に少なく、近隣住人の憩いの場となる空間が少ないというのも問題の一つである。



図 1 敷地図

3. プログラム

現在、対象敷地を囲う道路は、災害時に緊急車両が通る防災道路として機能する。本計画では防災道路に面していない住戸に対し、災害時の避難を考慮した集合住宅を計画する。

現在の主流となっている建築の高層化による緑地の確保ではなく、低層密集という形式を崩すことなく計画を行う。避難動線の明確化、緊急車両のための防災道路の確保をしつつ、路地空間を創出する。

本計画で述べる防災道路とは、行政が指定した幅員 6m 以上の道路とは異なり、日常生活では自動車の通過は無く、災害発生時にのみ緊急車両が通過する道路である。



K06011 市野瀬優大

4. コンセプト

密集市街地の最大の特徴である路地空間。住人のプライベート領域が拡大していくことで、それぞれが干渉し合い強く結びつく。防災を考えた上でも住人同士の強い結び付きというものは、非常に有効である。緊急車両が到着するまでの近隣住人同士の救助活動や、お互いの生存確認も円滑なものになる。

現在では住戸同士は路地によって線状に結びついているため、同じ領域内の交流しか生まれない。そこで、線状につながるコミュニティを複数本配置することにより、異なるレイヤーでのパブリックスペースが形成される。(図 2)これにより、異なる領域の住人同士が他のパブリックスペースでつながり、コミュニティの連鎖が発生する。各々は小さなコミュニティでありながら、それらが異層的につながる事でひとつの集合体になる。細かな住戸の密集を最大限に活用する事で災害による被害を最小限に抑える。

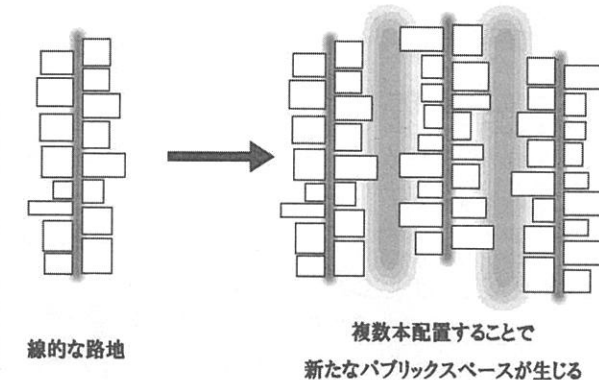


図 2 コンセプト図

5. ダイアグラム

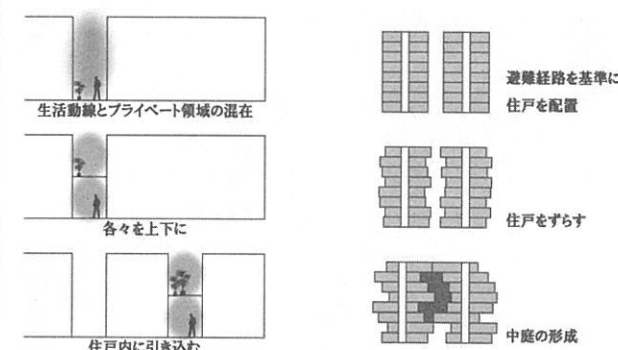


図 3 ダイアグラム

路地空間における防災上の問題点は、生活動線と拡大した住人のプライベート領域が重なっている事である。これらの領域を上下にセパレートすることで、路地空間と避難経路となる生活動線を両立させる。避難経路を確立することで、住人のプライベート領域の拡大をさらに促すことができる。そのために住戸内に路地を引き込み、中庭として生活空間の一部にする。これにより、住人の

路地に対する意識が、パブリックからプライベートへと変化する。(図 3 左図)

この生活動線と中庭を内包する住戸ユニットをつなぎ合わせることで、避難経路と路地空間を創出する。避難経路を基準として各住戸をずらし、住戸がぶつかり合い閉鎖的なヴォイドが形成される。このヴォイドが、面した住戸同士の新たな中庭となる。(図 3 右図)住戸ごとに設けた中庭とは異なる住人が集うことで、そこに異層的なコミュニティが形成される。この操作を反復させることで、小さな集合体が様々な場所でつながる集合住宅を計画する。

6. 計画

I) 配置計画

本計画では旧街道を基準として住戸を配置することで、周辺の街並みとの調和を図る。しかし、避難経路は防災上の安全を考慮し、周囲の防災道路へ最短で避難できるよう配置する。

また、敷地の中央に災害時に緊急車両が通行できるオープンスペースを確保する。このオープンスペースは普段では、近隣住人の憩いの場として機能する。

本計画では住居の他に、SOHO も配置する。SOHO は防災道路に面するように配置することで、地域住人との交流を図る。また、住人が常に在宅している SOHO を配置することにより、突発的に発生する災害に対しても迅速に対応出来る。

II) 住戸計画

住戸計画においては、低層の住戸のみで構成する。下層に避難経路を設け、上層では各住戸の中庭を連鎖することによって、路地空間が創出される。また、ユニットで構成される住戸を多様化するために、各住戸内でもずらす作業を行う。この操作は各住戸の中庭にも影響を与え、複雑な空間を生み出す。

III) 異層的コミュニティ

各住戸内に配置した中庭においては、プライベートの流出による住人同士の密な結び付きが形成される。この空間では井戸端会議や回覧板など、家族単位でのコミュニティが形成される。住戸に囲まれた中庭へはプライベートの流出は無く、個人単位でのコミュニティが形成される。防災道路においては、SOHO の住人による情報や意見の交換が行われる。

参考文献

『それでも、「木密」に住み続けたい!』後藤治 関澤愛 三浦卓也 村上正浩 彰国社 2009
『千住仲町の安全・安心まちづくり』足立区都市整備部 2008
『首都直下地震対策 被害想定』首都直下地震避難対策等専門調査会 2005
参考HP
『足立区公式ホームページ』<http://www.city.adachi.tokyo.jp/>

